脚本・シナリオ
『シンクロニシティ』

2017.9.10
第５稿 Ver. 1.6

作者名：渡部 健司
脚本協会登録番号等

「ヨーコの場合」・登場人物表

瑤子（21）	主人公。
菜緒（21）	瑤子の親友
早苗（21）	瑤子の高校時代の友人。高卒で就職 OL.
教授（55）	大学教授
後輩（16）	瑤子の高校の同じバスケ部の後輩。

人物の名前（年齢）

人物の名前は

タブキーを押して、ここに人物の簡単な説明

ここ1ページに収まるようにする

『ヨーコの場合』

1.

別の日　大学構内ラウンジ

大学のラウンジにあるデジタルサイネージに休講情報が掲示されており、人だかりが出来ている。

男子学生　「おう、本宮休講！ラッキー」

瑤子が後ろでその声を聞いている。

瑤子（Na）　「えっ、本宮休講なの」

菜緒が後ろから近づいていき、

菜緒　「ヨウコ、もしかして休講なの？」

瑤子　「うん、ラッキー！」

菜緒　「この後、ヨウコは？」

瑤子　「今日は何もなし」

菜緒　「私バイトだから、またね」

瑤子　「うん！」

瑤子はその場を離れて大学をあとにする。

2.

帰り道の電車の中　夕方

電車の中、瑤子が立って吊革につかまって何気なく外を見ている。

瑤子(独)　「いつもなら、どこかで買い物かブラブラするんだけど、今日はなんか気分が乗らない」

3. 昨晩の家で(回想)

父　「写真？写真なんかで食っていけないだろ？お前は文学部だろ？なんで写真目指さないといけないんだ？えっ？美大ならいざ知らず。お前に写真家の才能なんてなんだから」

瑤子(独)　「そう聞かれて、上手く答えられなかった」

4. 居酒屋(回想)

瑤子(Na)　「高卒で就職した友人に大学は楽しい？うん、楽しいよ、と答えたけど。正直本当に楽しいのかどうかはよくわからない。毎日、課題に追われて、これが自分にとって役に立っているのかさえ分からなくなってる。私ももう就活の進路を決めないといけないんだけれど、そう思ってひと足先に社会人の早苗にいろいろと話を聞こうと思ったんだけど」

瑤子　「OL楽しい？」

早苗　「仕事なんてぜえんぜん楽しくないよ。毎日単純な事務経理と電話の応対、あとはパソコンの入力、ほらエクセルっていうの？こうタテとヨコにますがいっぱいあってさ、そこに数字やら文字やらを打ち込んでいくの。もうずっと単純作業だよ。まあ、給料分はきっちり働くけどそれ以上はね、働きたくないよ」

瑤子(Na)　「そんなもんか、と自分は笑ってたけど、いざ自分が働くとなるともっと働き甲斐のある仕事や夢のある仕事を・・・・」

早苗が少し酔っぱらって、ワインを注いでくる。グラスを持って口を付けるがあまり笑えない。対照的に陽気な早苗。

5.

帰り道の電車の中　夕方

夕方の風景が窓に広がっている。瑤子が何かに気がつきそれを目で追う。そこには杉の大木が見えている。

瑤子(独)　「あれってもしかしてウチの高校ののタカ杉だよね？」

6.

(回想)高校時代

杉の木を見上げている高校時代の瑤子。先生が杉の大木を説明する声が重なる。

先生(声)　「この杉の木はなあ、もう５０年以上前に植えられた木で、タカ杉と呼ばれてる・・・」

7.

帰り道の電車の中　夕方

懐かしそうに目で追いながら、時計に目をやる。時刻は１８時少し前。

瑤子(独)　「たまには行ってみようかな」

8.

高校の正門前

正門をくぐる瑤子。懐かしそうに校庭を歩く。ウサギ小屋。鉄棒のある場所を巡る。

9.

高校時代回想

ルーズソックスのまま（上履きを脱いで）廊下を滑ってキャッキャ遊んでいる。

10. 高校の教室入り口下駄箱付近

教室入り口の下駄箱で靴を脱ぐ。スリッパを探すが見つからず、そのままソックスのまま中にはいっていく。

瑤子(独)　「うわあっ、ソックスで歩くの久しぶりだ」

少しソックスでわざと床を滑りながら、教室を巡っていく。いくつかの教室の中、風景。

11. 高校時代回想

当時流行った黒のルーズソックス姿。友達のトモコが寄ってきて、

トモコ　「ねえ、売店に早くいこ。やきそばぱんハムサンドなくなっちゃう」

瑤子　「うん！」

階段を大きく駆け下りていくトモコ。瑤子はゆっくり階段を下りていく。

12. 高校の校庭　夕暮れ

校庭にいた学生たちがいなくなり、体育館から部活の練習の声が聞こえる。

13. 高校の体育館

中では女子バスケの部員たちが練習してる。

瑤子(声)　「もう何年たつんだろ。下級生の顔、誰も分からないや」

ドリブルをして目の前を走っていく。

瑤子(声)　「あの頃は夢中でボールを追いかけてた。何のためとか、何もなくて。でも今はどうだろう。いまひとつ何をしたいのか分からない」

目の前にボールが転がってきて、思わず拾い上げてチョットだけボールをドリブルしてみる。

後輩　「ありがとうございます！」

14. 瑤子の空想

彼女たちに混ざって一緒にコートを走り回る。

15. 高校の体育館

瑤子はベンチに座ったまま。練習を見ている。

練習が一段落ついたようで、掛け声が静かになる。

後輩が冷えたペットボトルを差し出す。

後輩　「これどうぞ！」

瑤子　「ありがと」

後輩　「バスケ部の先輩ですよね？」

瑤子　「あっ、うん25年卒」

後輩　「じゃあ5年先輩ですね。失礼します！」

瑤子は一礼をして走り去る後輩を少しだけ手を振って見送る

16. 高校の正門

瑤子は正門を出たところで後ろを振り返る。

瑤子(独)　「あの頃と変わらないか、いや、知らないところで変わっているんだろうなあ」

瑤子はそのまま元気に歩き出す。

瑤子(独)　「あの頃はあの頃で、少しだけ背伸びしながら、がむしゃらに生きてたんだろうなあ・・・」

瑤子ふと立ち止まり、空を見上げながら、

瑤子　「がむしゃらって、どんな字書くんだろう」

17. 大学講義教室

瑤子(独)　「いつもよりひと列前に座ってみた」

瑤子(独)　「教授の声も、黒板の文字も、少しだけ、新鮮に見えた気がした」

瑤子は真面目にノートを取っている。

瑤子(独)　「私も今日からがむしゃらになってみよう!」

授業が始まっている中、遅刻して入ってきた菜緒が瑤子の横に体をぶつけてきながら座る。そして小声で、

菜緒　「おはよう!」

瑤子はちょっと反応するが、直ぐに前を向く、

菜緒は少し不満そうに、

菜緒　「何それ、ねえねえ、帰りに駅前にできたパフェ食べに行かない?」

瑤子　「うん、ゴメン。ちょっと図書館で調べものしたいから」

菜緒は瑤子のノートを覗き込む、

瑤子は少し慌ててノートを隠そうとするが、菜緒に見られてしまう。

菜緒　「なあに、今日からむしゃむしゃって?何食べるの?」

瑤子少し恥ずかしそうに、

瑤子　「違うって!」

相手にしてくれない瑤子の様子を見て菜緒もノートを出して授業を聞き始める。

授業風景、熱心に聞く学生、居眠りをする学生、スマホを見る学生、など。

瑤子のノートには、

がむしゃら　の文字

我武者羅

その隣には　我　無　者　羅

瑤子(独)　「がむしゃらって我武者羅じゃあなくて、我を忘れてひたすら頑張ることかも」

18.　大学の図書館

瑤子がいる。書庫で本を見つけて歩き出す。

瑤子(独)　「今日からがむしゃら・・・・」

了